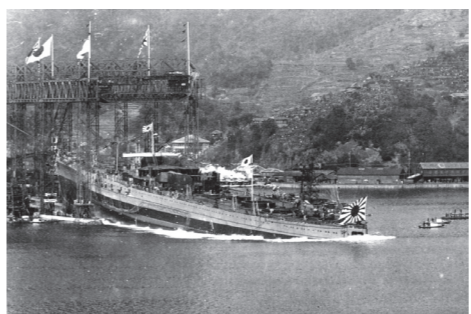


## 進水式の日々の長崎・佐世保——明治・大正・昭和戦前期——

齋藤 義朗

進水式とは、新造船を初めて水上に浮かべ、船の門出を祝う大きな節目である。式は大潮の日、午前中の最高潮位となる時間帯に合わせて行われることが多い。最大の見せ場は、支綱切断と同時に菓玉が割れ、巨大な船体が動き出す場面から始まる。

船台進水(船尾進水)なら船体が船台を滑り降りて水面に浮かぶまで、ドック進水(浮上進水)なら曳船が船体をドック外へ曳き出すまで。時間にして前者は一分程度、後者も多く見積もって二〇分程度であった。昭和戦前期までの式場内では、当日限定の記念絵葉書販売や臨時郵便局での記念スタンプ押印なども行われたが、式は概ね当日の午前中で終わってしまふものであった。それでも当日の長崎や佐世保では、万単位の人出で盛り上がりがあった。



進水中の戦艦「土佐」(大正10年12月18日)  
高台にも大勢の観衆がいる

三菱長崎造船所(一八八七—一九四五)では、三〇五隻の商船(一〇〇未満省く)、八二隻の海軍艦船が進水し、佐世保海軍工廠(一九〇三—四五)では、前身の佐世保海軍造船廠時代(一八九七—一九〇三)も含めると一〇二隻の海軍艦船が進水している(未成艦含む)。軍用艦船の進水式は、機密保持の観点からすべて非公開と思われるが、日本海軍では、昭和の戦時体制下を除けばひろく市民一般に公開していた。式場となる造船所内については招待券・整理券で入出場が管理され、配布の対象は、軍関係・官民の代表者ら来賓約一〇〇〇人のほか、軍人、軍属、工員とその家族および小中学校児童生徒等を含む関係諸団体などであった。場内に収まりきれない観衆は周囲を取り囲み、総

勢で万の単位に上った。三菱長崎や佐世保工廠でのおもな進水式における参観者数は、数万から七、八万人にも上ったと報じられている。商船でも貨客船「浅間丸」(昭和三)、龍田丸(昭和四)のような世界的な船舶となると二万余の観衆が詰め掛けた。なお、長崎の場合、駐在外国領事や商社、キリスト教系学校の校長など多数の外国人も招待した。これは国際都市長崎ならではのことである。

進水式参観者は、地元在住者ばかりではなかった。進水式は朝の式典であるため、「前夜に掛け地方より入込んだ拝観人も亦非常の多数に上った」(大正二年「霧島進水時」とされる。そのため、「下宿屋などは満員札止、殊に昨夜は迎陽亭、富貴楼、藤屋本店、鹿島屋にて造船所側からの招待宴が催ふされたので芸妓は箱止」(大正六年「日向」進水時)となったほか、三菱側は来賓の宿割りには忙殺された。長崎市内は進水式のために前夜から大混雑、宿泊施設は満杯となっていた。

進水当日の長崎は、『東洋日の出新聞』長崎日日新聞によると、戦艦「日向」進水式では、「七時、八時となると、大浦、浪の平、南山手、戸町道辺の海岸に向かった場所は恰好の観覧台とて、至る処一面の黒山を築き：(浪の平の)金比羅神社の如きは恰で人の面で毛氈を敷いたも同然：対岸の飽の浦、水の浦、立神方面も是に劣らぬ人出で、「海岸通りは実に芋を洗ふやうの大混雑」となっており、「神事(くんち)以上の大騒ぎ」と表現される盛況ぶりだった。また、佐世保における一等駆逐艦「曉」進水(昭和七)でも、「佐世保市内並に近県よりの来賓官民有志、小中学校生徒、一般観覧者万余の群衆は式場の周囲を埋め尽した」と報じている。進水式当日の長崎・佐世保は、かなりの人出で溢れ、整理券を入手できなかつた数万人の観衆も、三菱長崎・佐世保工廠の船台や船渠を眺望できる場所に陣取って、新鋭艦の誕生を見守っていたのである。

人出があれば商売が生まれるもの。「日向」進水では、三菱職員家族の

水式は、防諜対策の強化によって市民生活から切り離され、その賑わいは姿を消していった。再び長崎・佐世保の進水式に市民の歓声が戻るのは戦後になってからのことである。(長崎県文化振興課 主任学芸員)

### 風信

○十月九日午後、長崎の「おくんち」無事終了。続いて大浦、浦上、茂木、矢上等の各地区の特色ある「おくんち」が続く。

○十月十五日は国選択無形民俗文化財の「竹ん芸」が若宮神社(伊良林)である。その「みせ場」は最後の「泳ぎの段」であると言われる。

○十月二日午後一時半より「長崎県九条の会・委員会」井田洋子先生司会にて本会議室にて開催。

○十月十五日午後六時より恒例の「興福寺観月宴」開催通知あり。参加希望者は電話にて予約して下さいとの事(八二二—一〇七六)

○十月十九日午後一時半より「出島第三期復元事業完成記念式典」開催の通知あり。

○十一月三日午後一時半より恒例の「長崎市立図書館主催、第九回長崎学講座」開催。今回は、私(越中)と原田宏子女史の「長崎の絵画について対談」開催。参加希望者は直接又は電話(八二九—四九四六)にて申し込み下さい。会費不要。

○今月御寄贈いただいた書籍

一 永松実氏より『本邦初の洋食店「長崎初期の西洋料理店の開創者草野丈吉に関する新資料を多く取り入れた実に立派な永松氏の御力作でした。(KKエぬ社発行、二七〇〇円十税)

一 今里祐二氏(長崎市琴海史談会会員)より著書『里山に眠る有耳五輪塔』貴重なる資料が多く取材しており、大いに感謝申し上げます。

一 嬉野純一氏より『私の好きな長崎の神さま』長崎市内の三十六社寺の写真と紀行文。中には社寺でなく十八銀行本店横門にある「南蛮えびす像」「本河内水神社のカップ石」「光源寺のユウレン」矢上神社のコッコデショ」等もあり楽しい写真集でした。(長崎文献社刊・一二〇〇円十税)

昭和一〇年代前半にピークを迎えた進水式は、内外の情勢緊迫化とともに一変する。昭和十三年一〇月一七日、「進水時ニ於テハ其ノ艦種艦名ノ外一切公表セザルモノ」(軍務一機密第三七〇号)とされ、進水式は非公開、新聞紙面では艦名が公表されるだけとなった。さらに太平洋戦争の可能性が濃厚となってきた昭和十五年一月二二日、「自今新造艦艇、特務艦艇進水ノ公表ハ行ハザルコトニ定メラレ候」(軍務一機密第七五四号)と、進水自体が秘匿対象になった。

かつて「神事(くんち)以上の大騒ぎ」とも表現された長崎・佐世保の進

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二—一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

